

大河先生の学恩

伊藤公孝、伊藤早苗

大河先生は、東大の大学院でプラズマや核融合の研究を始めた私たちにとって仰ぎ見るスターであり、また、宮本梧楼先生に遡る研究室の伝説の主人公でもありました。辰年のお生まれで、ちょうど二廻り私たちより年上でいらっしゃり、「二廻りと言うな」と仰りながらお相手をして下さいました。

1974年にお目にかかって以来、途切れることなくご指導を頂く幸運に恵まれ、先生の学恩無くして、40年に及ぶ私たちの研究者人生は想像出来ません。

大河先生から受けたものは尽くしきれないのですが、最も貴重なものは、研究の仕方を教えていただいたことだと思います。もっと言えば、「頭の使い方」・「ものを見る目」という言葉がありますが、それを教えていただいたと思います。ご一緒していただくときに、また、食事や飲みに出かけるときに、伺う話が刺激的で、箸袋やコースターにメモを走らせ持って帰ったことがたびたびでした。自分がすっきりしたいだけでしょう。基礎研究は世間から見れば **postponable** です。科学者はたいていは数学は出来るが人に説明するのが下手な人たちなのだからそれを自覚しないと。業績はべき分布をする。論文の発表先が不本意だと思うより出る事の方が大事。研究は成功すればそれを捨てないと、等等。迷いを捨て前に進むための考え方を頂いたと思います。仰る事が一々もったもんで透徹しており、明るく遠くが見通せるレンズを渡されて、それで世界を見直す、という気持ちにさせられました。(教えを受けて自分では無自覚なのですが、『『どうなるか』ではなく、『どうするか』』としばしば口にしているようです。)

私たちは理論家として研究人生を送っていますが、「実験結果が見える理論家」を目指して努めて来ました。まがりなりにもそれが勤まったとすると、大河先生に「ものを見る目」を磨く方法を教えていただいたせいでしょう。学生だった頃、「世界中の実験家達の結果を見て新しい事を考えるような研究者になりたい」という夢を先生にお話ししたところ、「それは誰でも夢見る険しい道なのだ」と笑って諭された(励まされた)事を思い出します。

先生は自ら律するところ厳しく、いくら忙しくとも、1日に15分しか物理を考える時間がなくなってもその15分で集中して新しい問題を考えるのだと

仰っておられました。それだけ研究に厳しい先生が褒めて下さった事があり、何年経っても忘れません。そのときに「一度しか褒めないよ」と仰っていたのですが、確かにこの40年間で二人とも一度ずつ褒めていただきました。H-モード理論の論文が *Physical Review Letters* 誌に発表されたときに、アメリカ（ラホヤ）から「おめでとう」と電話をかけて褒めて下さったのは驚きでした。時とともにその仕事が自分を支えるものに育った時、大河先生がそこ迄見通して仰っていた事が分かり思いを深くしました。

先生は、学問でのつながり、とくに学統を大事になさっておられたと思います。金沢にいらっしゃったときに、理研仁科芳雄研究室が金沢医科大学に疎開して来て、学徒動員でその研究室での仁科先生達にお会いした事が、ご自身が物理学に進むきっかけであると仰っていました。「仁科先生は時折いらっしゃると、お茶と菓子を囲んでコペンハーゲン時代の話をしてくれました。理研のサイクロトロンを空襲から守った話も誇らしく仰っていたのを思い出します。」と仰る大河先生は大変嬉しそうな口ぶりでした。そのお話は、お茶とお菓子をお酒に代えると、大河先生との思い出に替わります。